



統計から社会の実情を読み取る

第95回 「いじめ」の国際比較 (PISA 調査)

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。郵国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。元立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト(<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>)を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著書に、「統計データはおもしろい!」(技術評論社、2010年)、「統計データが語る日本人の大きな誤解」(日本経済新聞出版社、2013年)、「なぜ、男子は突然、草食化したのか:統計データが解き明かす日本の変化」(同、2019年)等。



日本の学校ではいじめが多いか

世界各国の15歳の学校生徒を対象にした国際的な学力調査として関心が集まるOECD(経済協力開発機構)のPISA(学習到達度)調査では、学力テストに合わせて、就学上の状況の調査として、学校生活や生徒の意識について直接生徒に聞く調査を実施している。今回は、2015年PISA調査でこうした調査の一環として取り上げられた「いじめ」についての調査結果を見てみよう。

「いじめ」調査はOECD 33か国、パートナー国 21か国、合計 54か国の結果を得られるが、ここでは、一般的に先進諸国と見なされることが多いOECD諸国の中での日本の位置について見てみよう(図1参照)。

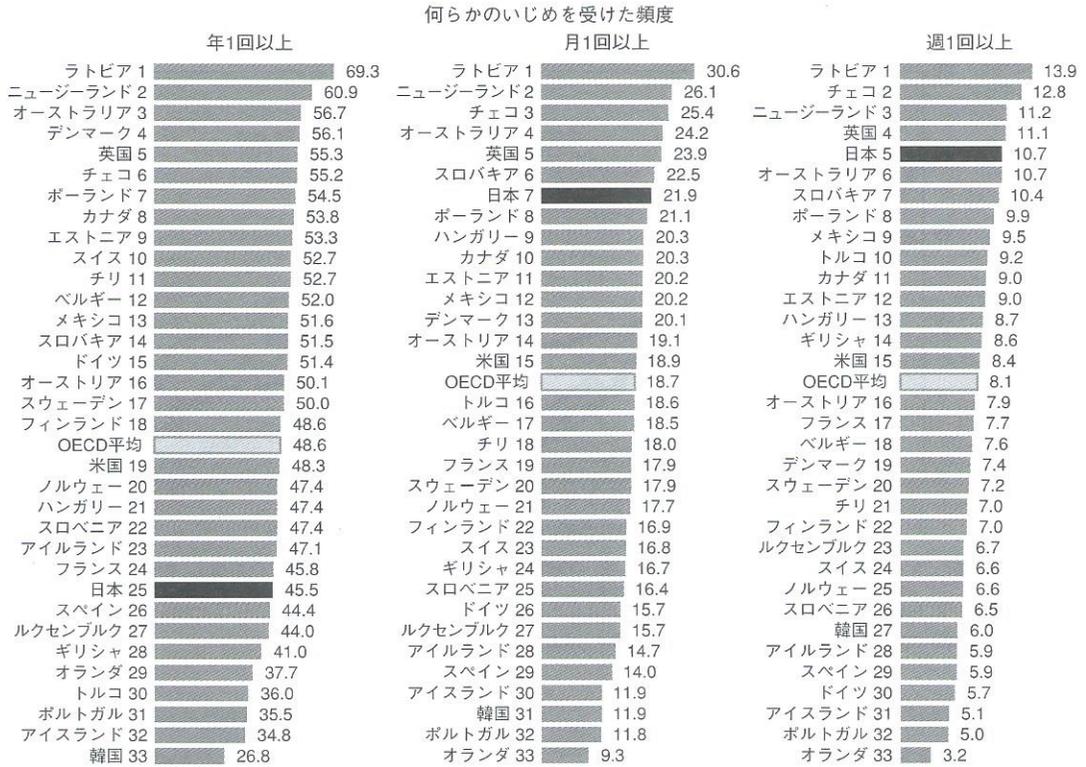
「仲間はずれ」や「からかい」など6項目について「何らかのいじめ」を受けている日本の生徒の割合は、頻度別に、「年1回以上」であると45.5%、「月1回以上」であると21.9%、「週1回以上」であると10.7%となっている。順位的には、OECD 33か国の中では、それぞれ、25位、7位、5位となっている。主要6か国(G7諸国から「い

じめ」調査不参加のイタリアを除いたフランス、米国、英国、ドイツ、カナダおよび日本)の中では、「年1回以上」は最下位、「月1回以上」と「週1回以上」では、英国に次ぐ2位となっている。

日本は、頻度の低いいじめについては順位が低く、頻度が高くなるほど順位が大幅に高くなる。これは、他の国と比較して、特定の生徒にいじめが集中する傾向があることを示している。いじめは繰り返されるほど深刻であると考えられる。この点を考慮すると、日本の学校では、他の先進国と比較して、いじめが多い傾向にあると結論づけられよう。

ところが、OECDの報告書は、全体的に数値が大きく、差がはっきりする「年1回以上」のデータに基づいてトータル指標を作成しているため、これに引きずられて、日本の公表機関となった文部科学省の国立教育政策研究所の報告書やこれに基づく報道(日経新聞電子版2017年5月2日)ではどちらかという日本はいじめの少ない国と結論づけてしまった。もう少し細かにデータを見て多い少ないの判断をすべきだったと思う。

図1 いじめの国際比較 (OECD 諸国)



注) 15歳(日本では高校1年)の生徒の自己申告による。いじめ (bullying act) は、「仲間はずれ」、「からかい」、「脅かし」、「持ち物隠し・破損」、「こづきまわし」、「悪いうわさ」の各項目について、受けたかどうかを調べられており、何かのいじめは、それらの何れかに該当しているという集計結果である。

資料) PISA 2015 Results VOLUME III STUDENTS' WELL-BEING, Table III.8.1

なお、週1回以上の順位から年1回以上の順位を引いた順位差が日本の場合20と大きい、同じように大きな順位差はトルコの20だけである。次に大きいのはハンガリーの8であるにすぎない。トルコも日本と同じように特定の個人にいじめが集中する傾向があるといえよう。

他方、日本やトルコとは逆に同じ値がマイナスで大きい国としては、ドイツとデンマークがマイナス15と目立っている。両国ではいじめが薄く広く広がっているといえよう。

いじめを受けやすいのは勉強のできる子かできない子か

いじめの頻度から見方を転じて、いじめを受け

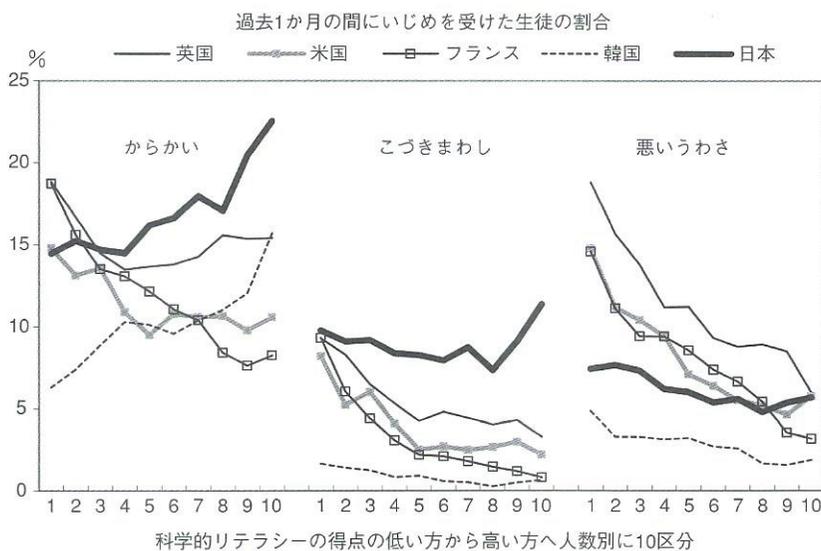
やすいのがどんな生徒かについての集計結果を見ると、日本は、他の国より社会分断的でないという特徴も見取れる。

まず、いじめられるのが勉強のできる子なのかできない子なのかを見てみよう。このため、図2には、PISA調査の本体部分である学力テストの結果と付帯部分であるいじめとの関係を主要国について示した。

図には科学的リテラシーのテスト結果の得点を低い方から高い方へ人数別に10区分した各区分の生徒について、過去1か月の間にいじめを受けた割合を示した。

各国の結果を見ると、「からかい」、「こづきまわし」、「悪いうわさ」といったいじめの種類によらず、概して、成績の悪い生徒ほどいじめを受ける割合

図2 いじめを受けやすいのは勉強のできる子かできない子か



注) いじめについては15歳(日本では高校1年)の生徒の自己申告による。項目名の英文は以下の通り。からかい(Other students made fun of me)、こづきまわし(I got hit or pushed around by other students)、悪いうわさ(Other students spread nasty rumours about me)。

資料) PISA 2015 Results VOLUME III STUDENTS' WELL-BEING, Table III.8.4

が高いことが分かる。

日本の結果を見ると、「悪いうわさ」については、成績の悪い生徒ほど比較的いじめを受けやすい傾向がある。しかし、他の国ほど成績と比例していない点も目立っている。

一方、「からかい」については、日本(および韓国)は、欧米の先進国では成績の悪い生徒ほどいじめがひどいのに対して、むしろ、逆に、成績の良い生徒ほど多くのいじめにあっている状況が明確である。

「こづきまわし」については、日本の場合、成績の最も悪い第1区分から第8区分までは他の国と同じように成績の悪い生徒ほどいじめられているが、第9区分より上では成績の良い生徒の方がいじめられている。成績の最も良い第10区分では第1区分よりもいじめがひどいほどである。「こづきまわし」は「からかい」と「悪いうわさ」をミックスしたような結果になっているといえる。

どの国でも、いじめの中で最も多いのは、実は、「からかい」であり、日本では特に多くなっている。

「こづきまわし」は、一般的にはそう多いいじめではないが、日本の場合はいじめの種類としては2番目に多くなっている。この二つのいじめの結果から、日本のいじめの特徴は、他の先進国とは逆に成績の悪い生徒より良い生徒がいじめられやすい点にあると結論づけられよう。

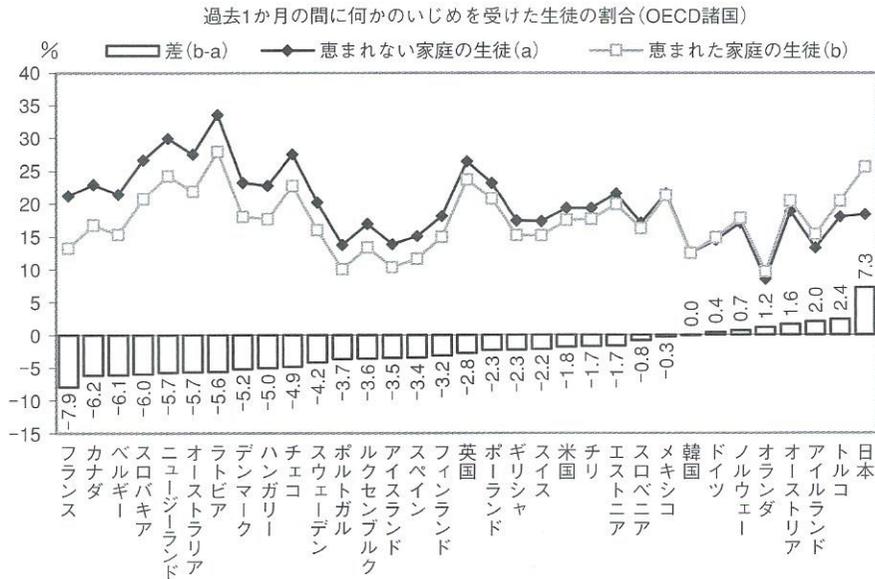
いじめを受けやすいのは恵まれた家庭の子かそうでない子か

最後に、いじめと家庭環境の関係を見てみよう。

図3には、OECD諸国の中では例外的といってよいのであるが、日本が、恵まれた家庭の生徒ほどいじめにあっていることを示すデータを掲げた。

OECD諸国の中では、恵まれない家庭の生徒の方がいじめにあう割合が高い国が33か国中25か国と多くを占めている。その差が最も大きな国はフランスである。他方、日本は、恵まれない家庭の生徒が1か月の間に何らかのいじめにあう割合は18.4%であるのに対して、恵まれた家庭の生

図3 恵まれた家庭かどうかによるいじめを受ける生徒の割合の違い



注) いじめについては15歳(日本では高校1年)の生徒の自己申告による。恵まれているかどうか(socio-economically advantaged or disadvantaged students)は、両親の教育水準、職業上の地位、資産保有(蔵書数を含む)から算出される指標で測られ、ここでは下位4分の1と上位4分の1の生徒を、それぞれ、「恵まれない家庭」、「恵まれた家庭」としている。
資料) PISA 2015 Results VOLUME III STUDENTS' WELL-BEING, Table III.8.4

徒は25.6%とこれを大きく上回っており、その差はフランスとは逆の方向で最大である。欧米では貧乏人の子ほどいじめられるのが一般的であるのに対して日本では金持ちの子ほどいじめられているというのだから実に対照的である。

図3において、いじめを受けた生徒の割合の順位を調べてみると、日本の場合、恵まれた家庭の生徒ではラトビアに次ぐ第2位と高い順位であるが、恵まれない家庭の生徒では19位と低い方となる。

一般に勉強のできる生徒は家庭環境が恵まれている生徒であろうから、先ほど成績でいえたことは家庭環境でも成り立つと考えられるが、それが、データで実証されている格好である。

日本の学校では、勉強のできる子や恵まれた家庭の子に対するやっかみや足を引っ張りたい気持ちが強くなっているといえる。日本人に特徴的な「和をもって尊しとなす」精神が暴走した結果だともいえよう。

まとめ

日本の学校のいじめは、頻度の高いいじめが多いという点では、特定の個人を追い詰めるという意味でかなり深刻であるが(図1)、他方、成績および家庭環境のどちらにおいても、「弱い者いじめ」としての側面は弱く、欧米と比べて、社会的には悪質でないともいえよう(図2~3)。もし、「弱い者いじめ」だけをいじめとするなら、日本はいじめの多い国とはいえなくなると考えられる。

このように、いじめの国際比較データを見ると、頻度別の結果も成績・家庭環境別の結果も日本の状況は世界的な一般傾向からの著しい乖離が認められる。私の経験では、国際比較データでは、日本は世界の常識が通じないことが多く、その分、ランキングなどによる単純な判断が誤解を生む可能性が大きいので注意が必要である。しかし、データをよく見れば、日本人の自己認識を深めることができるという意味で、興味深さもまたひとしおだといえる。